

ワークショップ「ウィトゲンシュタイン：その生と思想から受け取りうるもの」 趣旨説明

関口浩喜（オーガナイザー*）

オーガナイザーが「本ワークショップの趣旨はこれこれです」とあらかじめ述べてきたところで、実際のワークショップがその趣旨に沿うかたちで進行するとは限らない。そして、あらかじめ設定していた趣旨からの逸脱が、必ずしもワークショップの失敗を意味するわけでもあるまい。さらに言ってしまうえば、もしかすると趣旨なるものとは、ワークショップが進行しているそのさなかで発生する（あるいは、事後的にとり出される）ものなのかもしれない。しかしながら、「ウィトゲンシュタイン：その生と思想から受け取りうるもの」という、いささか捉えどころのないタイトルを掲げてしまった手前、このワークショップが何を目指しているのか、それについて若干の説明を施す責任がオーガナイザーである私にはあるだろう。そこで、本ワークショップの紹介とそれへの招待とをかねて、以下でその責任を果たしたい。

といっても、趣旨説明は一行で済む。新たなウィトゲンシュタイン像を模索すること、それもできる限り広い視野と多様な観点から、それを模索すること、それだけである（二行になってしまったが）。そのためにこそ、何でもそこに入れられる容器として、あえてこの、多少なりとも捉えどころのないタイトルを選んだのである。したがって、本ワークショップが目ざすところを特徴づける言葉は、「限定」ではなく「拡大」であり、「集中」ではなく「展開」であり、「閉鎖」ではなく「開放」である。少なくとも、専門家同士が限定されたテーマをめぐる、解釈の細かさや正確さを誇り競い合う「解釈ゲーム」に興ずるつもりはまったくない（その種のゲームが意味のない時間つぶしだともでは私は考えないが、本学会のワークショップにはふさわしくない行事であることはたしかであろう）。

今回のワークショップでは、鬼界彰夫、星川啓慈、丸田健の三氏が提題者として登場する。鬼界氏は「イロニー」という観点から、星川氏は「宗教（学）」という観点から、丸田氏は「レトリック」という観点から、それぞれ、ウィトゲンシュタイン像のうちに「眼前にあるのに気づけなかった」新たなアспектを見出す試みを行なうことになる（これら三つの観点は、現時点で私が予想しているものである。本番までには、多少の変更もあるかもしれない）。どれも、これまでとり上げられることの少なかった観点ばかりである。これら三つの観点がどのように交差し、どのようなウィトゲンシュタイン像を新たに結ぶことになるか、ぜひ楽しみにしていただきたい。

* 日本科学哲学会では、「オーガナイザ」と、最後の「ザ」に音引きをつけない表記を採用しているようであるが、私は日頃の自分の発音により忠実な「オーガナイザー」という表記を用いる（といっても、日頃それほど頻繁にこの単語を口にしているわけではないが）。